気仙沼本吉地区婦人防火クラブ連合会ヒアリング記録

日　時　　2011年10月17日（月）14:00～

場　所　　気仙沼・本吉地域広域行政事務組合消防本部

参加者　　千葉　恵美子　唐桑町婦人防火クラブ連合会 会長
　　吉田　由岐子　気仙沼市婦人防火クラブ連連合会 会長
　　及川　秀子　　本吉町婦人防火クラブ連合会 会長
　　千葉　みよ子　南三陸町婦人防火クラブ連合会 副会長

左から千葉恵美子さん、吉田由岐子さん、及川秀子さん、千葉みよ子さん

１．背景・概要

気仙沼市は、宮城県の北東端の太平洋に面して位置し、南は南三陸町、西は岩手県一関市と宮城県登米市、北は岩手県陸前高田市に接している。平成18年3月31日に気仙沼市と唐桑町が、平成21年9月1日に気仙沼市と本吉町が合併し、現在の気仙沼市を形成している。平成22年10月1日現在で、人口73,489人、25,457世帯が暮らしていた。

東日本大震災では津波により、長い海岸線に沿って大きな被害を出し、死者1,028人、行方不明者371人、住宅に被害は8,522棟・半壊2,436棟にのぼっている（平成23年11月2日現在）。

南三陸町は、平成17年に歌津町と志津川町が合併して誕生した町で、東は太平洋に面し、リアス式海岸特有の豊かな景観がみられるのとともに、三方を標高300～500mの山に囲まれた、豊かな自然環境を形成している。平成23年2月時点で、人口1万7千666人、5千362世帯が暮らしていたが、東日本大震災では津波の被害を大きく受け、犠牲者は死者564人・行方不明者333人、住宅は全壊が約3100棟・半壊が約150棟にのぼっている（平成23年11月2日現在）。

今回は、気仙沼市の旧気仙沼市・唐桑町・本吉町の各婦人防火クラブ連合会の会長と、南三陸町婦人防火クラブ連合会副会長よりお話を伺った（なお、南三陸町婦人防火クラブ連合会会長が今回の東日本大震災で犠牲となられました。心より冥福をお祈りします）。

この地域一帯の婦人防火クラブも大変熱心な活動が継続して行われてきており、海沿いか高台か山手かなど、地区により被害のありようには差があるが、全体としてたいへんに厳しい被害の中にあっても、クラブ員はそれぞれに状況判断を行い、避難誘導、救助、介護、炊き出し、避難所の環境改善、効果的な物資配布など、さまざまな支援活動を展開している。ヒアリング時点では、活動を見合わせている地区も多いが、各地区のリーダーたちは組織の重要性を深く再認識しており、組織の維持を前提に、再開できる地区から取り組むという状況になっており、今後については様子をみて考えていくという。

２．詳細

①それぞれの避難・対応状況

■千葉　みよ子 さん　（南三陸町婦人防火クラブ連合会 副会長）

地震が起きた時には自宅から車で2・3分のワカメ工場にいたが、かなり大きい地震だったのですぐに帰るよう言われ、急いで自宅に帰った。夫は自宅におり、少し障害のある子どもが志津川の福祉作業所に行っていたが、その作業所は高台にあり、避難所にも指定されている場所なので安心しきっていた。

そして夫とともに避難しよう、と思ったときに、隣の90歳を過ぎた一人暮らしのおばあさんを思いだし一緒に避難しようとすると、おばあさんがたくさんの荷物を持って出てきた。それを置いていくように説得したりしているうちに車で逃げる時間を失い、津波に追われてあわてて山を登ったが、引っ張ったり押したりして登らせていたそのおばあさんが途中で気を失ってしまった。なんとか引っ張り上げようとぎりぎりまで頑張ったが、津波のあまりの強い力にわたしは思わずおばあさんの手を離してしまった。本当にかわいそうで、おばあさんが浮いて流されるのをみながら、もうわたしたちもだめだ！と思ったが、どうにか山を上がった。なんとか津波から逃れると急に、少し離れた地区に嫁いでいる娘と孫を思い出し、携帯電話を何度もかけるが全く出てくれない。安否を案じながらしばらくその場にいるとすぐ夕方になってしまい、雪も降ってきた。この場から移動して避難所に行かないと後々みなに迷惑もかけるし、避難所自体どうなっているかも心配だったため、山を3つほど超えて歌津中学校の避難所へ入った。そこで話を聞くと、かなり高いところにある小学校の床まで津波がきたので、小学校いた人たちもみな、すぐ上の歌津中学校に移動してきたという。

しかし孫と家族の姿が見えなかったので、また山手の方の避難所を探してあるいたが、暗くて寒くて、わたしは途中で力尽きてしまった。そこで2つ目の避難所にとどまり、一晩中ご飯の炊き出しを手伝った。近所の人がコメを持ち寄ってくれて、できたものを男性たちが避難所へ運んでくれたので、女性たちは動ける人みんなでおにぎりを握った。そのときはまさか、娘と孫を含めて嫁ぎ先の家族が全員、津波に流されているとは思いもせずにいた。

その後わかかったのは、どこを歩いても娘も嫁ぎ先の家族もみなさん探しても見つからないという事実。あきらめきれずに、一か月以上も探し回った。また、南三陸町の防災センターに最後までいたという息子も、一カ月たっても見つからなかった。

南三陸町では婦人防火クラブは全戸加入であることから、動ける女性たちはみなよく動いてくれて、あまり体がよく動かせない高齢の女性たちまで、楽な姿勢を取るなどしておにぎりを握る係りなどになって協力してくれた。避難所では3か月間みんなでがんばった。子どもも特別扱いせず、おやつも自分たちで配るなどみんなが主体的に動いた。

本当は自分も地域のリーダーとして動かなければならなかったのだが、家族が何人も行方不明という厳しい状況だったので、地域のみなさんが気づかって「ご自分のことに専念してください」、と言ってくださって、本当によく動いてくださった。大きい行事など、どうしても代表で出る必

要がある場合を除いて、活動はみなさんにお願いした。
　歌津中学校では最初、1日におにぎりひとつとカンパン3枚といったような状況で毎日を過ごし、飲み物も満足に手に入らない状況で、一ヶ月近く外部からの物資はあまり入ってこなかった。歌津は南三陸町の中でも本当に孤立してしまっていた。後日、自衛隊が沖に船をとめて、さまざまな物資を供給してくれるようになって、とても安心した記憶がある。
　わたしたち山手の地域でも防災訓練は普段からして、協力体制も組んでいたので、発電機を持っているお宅で保管されていた玄米を精米して提供してもらったり、ＬＰガスが使えたのと山手にたまたま井戸水があったので、それを使って炊き出しも実施した。ガスボンベの中身がなくなったら、よそのお宅の残っているところから借りてきて使おうということで、どんどん使用することにした。特に最初は、冷凍庫などで各家庭にストックされているものの、電気が止まって無駄になってしまうようなものを持ち寄って、なんとかしのいでいた。行政から、物資の係りをやってくれといわれたときも、みなさんが運転したりどんどん主体的にモノを運んだりした。ちなみに、他の高台にある地域の避難所では、冷蔵施設にたくさん食品を保管していた会社のあったため、肉などさまざまなものが支援物資として提供されていたという。
　物資は、届くところには届くが、そうでないところには行き渡らなかったので、これは非常に問題だと思う。
　自分自身は山育ちで、海も年に１度見るか見ないかといった生活だったこともあり、小さいころにチリ津波地震があったものの、まさかここまで津波が来るとは思っていなかった。ものすごい力で家などが流され、よせては流れていく。いまだに何がなんだったのか、理解ができないという気持ちでいる。みなさんは「がんばって」と言ってくださるが、正直、何をがんばれば良いのか、わたしの気持ちの中ではまだ何も見つかっていない。現在は仮設住宅で暮らしている。
　私自身のことに戻るが、障害のある娘を施設に通わせていて、地震後はとても心配はしたものの、施設は高台にあるし、職員もいるのでまず大丈夫だろうと考えていた。
　ところが、その施設が全壊でたいへんな状況になっていると聞いていてもたってもいられず、歩いたら半日はかかる道のりを歩き始めた。運良く車が通りかかり、近くまで乗せて行ってくれたが、途中から瓦礫を超えていく状況で、かき分けながら進むと、現場で、「お母さん、驚かないでください」と施設職員の方に言われた。施設の中を見ると、1階の天井下30センチのところまで水がきたことがわかった。娘は運良くドアに挟まれて助かったが、お2人が亡くなったという。娘を含めて施設のみなさんは、裏山の道なき道をなんとか登り、高台の高校に避難させてもらっていたが、みな着るものすらない状態。
　床に寝かされていた娘は、下着もみな津波にもっていかれてしまったそうで、高校生のジャージーを着せてもらった状態で、カーテンで包まれて一晩を明かしたという。全身打撲で体全体が腫れ上がっており、とても一人で連れて帰れる状態ではかなった。近隣に住む方にお願いして古い上着をいただき、それを着せてやった。翌日、数人の男性の方に頼んで一緒に来ていただき、おぶったり、途中みつけた一輪車に乗せたりして何とか地元につれて帰ったが、いまでも体中に傷跡が残り、全身痙攣の症状が出るなど、とてもつらい状況にある。

■及川　秀子 さん （本吉町婦人防火クラブ連合会 会長）

　気仙沼市内で会社をやっているが、昨年2月28日のチリ地震の津波では、集落のかなりの人数の方たちが、自分の工場に避難してきたので、宮城県沖地震など、もし次に何かあれば自分のところが避難所になるのかもしれないと、一年前に漠然と思っていた。
　地震の時は会社にいたが、以前、婦人防火クラブのリーダー研修会で、君が代をゆっくり歌うとちょうど1分ぐらいと教わったので、3月11日もゆれ始めてから、「みなに大丈夫だから、大丈夫だから」、と声がけながら、ゆっくりと君が代を心の中で歌い続けた。3回ほど歌ったので、だいたい3分弱ぐらいは揺れていたと思う。
　わたしはまず従業員の命が大切だと思い、工場のある方へ向かうが、気仙沼と本吉の境あたり

で、遠く海の方に茶色の線が見えたので、「津波だ！」と思い、乗っていた会社の大きめの車を、国道をふさぐように横に向け、後方の2・3台の車を山側へ逃げるよう誘導した。それでも振り切って本吉方面に行く車が2・3台あった。そうこうしているうちに、大きな船やイチゴ栽培のビニルハウスなどが自分のほうへ流れてきて、あっという間に水が来た。気仙沼方面にハンドルを切るとそちらの方面も車などが流れてくる。「命なんてこんなに簡単にだめになるのか」「もうだめだっ！」と思ったが、思い切って細い街路に車を突っ込み、車を乗り捨て、つめを立てて山をあがった。車を乗り捨てたときには水に半分つかっていたので、ほんのわずかな差で津波を逃れたところだった。

とにかく一番気がかりなのは従業員さんたちで、息子たち3人も工場にいるため電話をかけたがすでにつながらなくなっていた。そして歩いて工場に行こうかとも思ったが、大粒の雪がボタボタと降ってきたことと、その日の昼間は暖かな日だったので薄着で出てきてしまったこともあり、階上中学校へ避難。1200人ほどが避難してきていたが、そこで一晩食料の配布を手伝うなどした。

翌日になってから半日かかって山道をたどり、お昼前ぐらいにようやく工場へたどり着いたが、工場には地域の人が約100人、それから国道を走っていて車ごと避難してきた見知らぬ方たち約50人ほどが避難してきていた。わたしたちはこうして、3月11日から工場を避難所として解放してきた。

婦人防火クラブでは、防災に対する心構えと人の命の大切さ、そして連携の重要性を学んできていたので、「いまはまだ他の地域とは連絡も取れず、移動もできないので地域全体を支えることはできないが、わたしは今、ここの人たちだけは絶対に守る！」と心に決めて支援に入った。

まず、工場では機械をすべて端へ寄せて、ダンボールを床に敷いて100人の地域住民の方に休んでいただいた。また、事務所など他のスペースは、外部から避難してこられた方に使っていただいた。

幸運なことに、コンビニエンスストア向けの配送トラックが、たくさんの食料を積んで避難してきていたため、積荷をすべて被災者の方のために提供していただいた。また、飲料メーカーのトラックも避難してきていたため、飲み物はこちらから提供いただいた。ＬＰガスはすぐに使えたので、ダイドードリンコの水を沸かして赤ちゃんのミルクも作ったり、自宅がかろうじて残った家の方たちがお米を持ってきてくれたので、おかゆを炊いて少しずつわけていただいた。

事務所では地震後すぐに解散して帰宅したが、家族も従業員もみな無事だったことが一番よかったと思っている。後日、従業員を一人ひとり足であるいて探し、全員の安否が確認できるのに20日間かかったが、しかし、全員無事ということがわかった時点ですぐに、事業が再開できると確信した。やはりなんといっても人が大切であり、みなさんの生活もかかっている。

しかしまだ電気も水道も回復していなかった。そんな中、避難所として工場を提供していた集落の方たちが協力して発電機を持ってきてくださり、それで4月4日から工場も稼動することができた。

また、避難してきている28世帯105人の住民の方たちは自主的に、毎朝8時に集合して全員点呼で安否を確認し、一人一役ということで、それぞれが何かしら役割をもち、毎朝その日にする作業を決めて行動していた。男性を2班、女性を2班に分ける形で班編成を組んで、道路を切り拓いたり、各家の片づけをみんなで順番に行ったり、子どもを預けあったり、食料を調達したりして助け合った。

しかし外部からの支援が来ないため、わたしはしばらくしてから行政に、「100人以上の人が避難しているので、避難所として正式に登録してほしい」とお願いしたのだが、認めてもらえず、指定された避難所に移動してくれという一点張りだった。これが一番残念なことだった。それで、申し訳ないとは思ったが20日ぐらいたってから、以前、宮城県の地域振興局へ配属された関係で気仙沼地域にいらして、現在は県庁にもどっている県職員の方に直接電話をして事情を話すと、その日から避難所指定を受けることができ、水や食料が届くようになった。水の確保が一番苦労した。

5月25日に電気が、28日に水道が復旧したので、わたしの住民のみなさんに対する役割もそのあたりまでかなと思ったが、家を失ってまだまだ大変な方がたくさんおられ、従業員も寝泊りして

いる状態だったので、7月24日まで避難所として利用していただき、24日に閉所式をおこなった。
婦人防火クラブとしての活動であるが、本吉町も全戸加入で各世帯の女性たちがクラブ員である。そこで工場にはお母さん方がみな来ておられたので運営は全てお願いして、わたしは本吉の他の各避難所を回り、クラブ員の方たちを励ましてまわった。ぜひ地域の方にお呼びか掛けして、みなさんで協力しあって頑張ってくださいね、などと声を掛けるのと同時に、どの避難所も物資が仕分けされずに山のように雑然と積み上げられて、被災者に渡らない状態だったため、特に物資の仕分けをしていただくようお願いした。服も男性用、女性用や、サイズごとに細かく分けることで、毎日何百にもの人が取りに来られるようになったりと、このようにしばらくは婦人防火クラブ員が各地で仕分けをサポートした。こうして回った避難所は十数か所と記憶している。
とにかく、こうした大規模災害時には、前例がないからといって認めないようなことばかりでは何も進まない。前例を作ってほしかった。その日その日を生きて今日がある。反省すべき点は多々あると思う。
わたしのところの工場でおこなわれた避難所活動や地域の助け合いは、行政に依存せず、自立的に最後まできれいにやりとげることができ、誇りに思っている。従業員さんもうちも含めて、自宅はみな流されたが、こうした経験を重ねてきたので、顔は明るい。
このたびの経験で、失ってはじめて人の温かさや繋がりを本当に理解できるようになったと思う。そして全国から、世界から支援をいただいて、本当に感謝している。
何よりも命が一番大切。わたしたちは亡くなった人たちを忘れず、その人たちの分も、がんばって復興し、支援に対するご恩をかえすことができるようになりたいと思っている。いまから、何ができるか、ゆっくり考えてながら、がんばってまちづくりに取り組んでいきたい。

■吉田　由岐子 さん（気仙沼地域）

わたしは気仙沼市内でも、40世帯ほどが住む集落に住んでいるが、山手なので津波の被害はまったくなく、家が壊れていないかといったようなことが主な不安材料だった。皆さんのお話を改めて伺っていて、その違いをしみじみと感じた。ちなみに気仙沼市では婦人防火クラブは任意加入で、6地区で婦人防火クラブが活動しているが、この6地区は互いによく交流しながら活動をしてきた。
地震当日は仕事の時間帯だったが、病院に義理の父が入院していることもあり、そちらに付き添っていたので自宅にはだれもいなかった。地震後すぐに、家が心配で自宅へ戻り、プロパンガスが安全かどうか確認。そして再び出かけようとしたが、すでに国道46号線は大渋滞していたことと、ガソリンはあとで入れようと思っていたため残りが少なく、無駄に動くよりも温存しておく必要があると考え、仕方なく家に戻った。その時はメールがつながったので、家族などの安否確認ができたことはよかった。
しばらくしてもう一度職場へも向かおうと状況を考えてみたが、市の中心方面へ行く道は通行止めで、火事が広がっているのもわかり、とても動けないと思い自宅にとどまることにした。東の空が火事で夕焼けの如く真っ赤になっていて、まるで東西が反対になったのではいかとの錯覚に陥るようだった。
翌日、沿岸地域は非常に混乱しているだろうと思い、自宅で一日中炊き出しをおこなった。ご飯を炊いておにぎりをつくっては病院や消防団、消防署に運んだ。行政区は40戸足らずで、隣近所と言っても一軒一軒が離れており、歩いて十数分かかるところもあるので大変なので、（電話もつながらず車もつかえない状況の中）近所を周っている余裕があったら、とにかく個人でも炊き出しをしよう、炭水化物が取れるようにしようと、おにぎりやすいとんなどを作っては運び、作っては運びした。看護師さんも前日から何も食べてないと聞いたし、消防団・消防士さんたちも食べておらず、特に消防職員の人は差し出されない限りは食べないといったことも以前聞いたことがあったので、消防署にも食事を持っていった。
また地震当日の市内放送で、毛布が足りないということを伝えていたことと、物資も足りない

ことが分かったので、少ししてからは、徒歩で地区内を回って毛布や古着等の物資を集め、必要としてくれるところに持って行った。ある場所では、車椅子に乗った人が、上着もなくぶるぶる震えているのも見た。避難所については、1日3食ちゃんと食べられるところもあれば、長らく1日1食しか出なかったところもあるなど、食事や物資には偏りがあった。創意工夫でなんとかもう少し支援がいきわたるようにできたのではないかと改めて思う。

婦人防火クラブがある地域同士では、震災前から非常に仲良くしながら活動していたので、たとえ連絡が取れずとも、みなさんは地域ごとにそれぞれ必死にがんばっているだろうと想像していた。

後日、歩いて市内の各避難所を回り、なんとかクラブ員のみなさんを訪ね歩いた。歩きなので一日一か所ぐらいしか回れず、トイレも大変なので非常に厳しい状況だった。道なき道をかきわけて歩くこともあったし、水がはけていないところもたくさんあった。自衛隊や消防署・消防団のみなさん、医療関係者のみなさんなど、本当にたいへんな思いで活動してくださっているのだろうと思った。感謝の気持ちでいっぱいになった。

■千葉　恵美子 さん （唐桑町婦人防火クラブ連合会 会長）

わたしは唐桑半島の、高台の太平洋が見渡せる地区に住んでいるが、地震後に外へ逃げると、みなさん同じ場所に集まってきていた。双眼鏡を持ってきた人もおり、わたしに「海をこれで見てみろ」というので見ると、茶色い壁のようなものが迫ってくるのが見えた。

津波が来たら孤立する地域であるとの自覚があったので、常日頃から地域の人たちは一体となって訓練をおこなっていた。また自分は福祉協力員でもあるので、高齢者のみ世帯の家を声がけして回ったが、断水、停電など、生活が普通にできない状態だった。

別の地区の海沿いにある実家では、高齢の母親が一人でいたが、地震直後に兄が母を連れてなんとか裏山をあがり助かったという。しかし津波の一部始終を見ており、道路が寸断されていることもわかったため、一緒にたまたまいた他の二人の方にも、かわるがわる母を背負ってもらってそのまま裏山を登りきり、出たところの集落の人に助けてもらって、車でわたしの家まで送ってくれたという。こちらにたどり着いた時には、母も兄も雪でびしょ濡れで、とにかく母の体を温めることに必死だった。

他の津波被災のひどかった地区では、当日からクラブ員のみなさんが炊き出しをおこなっていたことを後から聞いた。私たちの地区の被害はそうでもないとはいえ、道路は寸断されてしばらくはだれも助けてくれる状況ではないということは理解ができたので、地域でなんとかせねばならぬと腹を決めて、翌日の朝から動くことにした。地震の日は、地域の2・3人の方に、明日朝6時集合で炊き出しをしたいので協力してほしいとだけ伝え、その日は母を着替えさせたり温めたりと世話をした。

翌朝集合場所へいくと、なんと15人ぐらいのクラブ員が集まってくれており、サランラップや保温用の発泡スチロールなど、炊き出しに必要なものをみな持ち寄ってきてくれていた。これは普段からの訓練や行事での共同作業のおかげだと思う。

なお、当初は火を起こそうと思ったが、気仙沼湾などで大規模な火事が起こっているのも見えていたので火の取り扱いも怖いと思い、ガス釜を持っているお宅にご飯炊きをお願いし（ＬＰガスは使えた）、炊き上がったものをみんなでおにぎりにするという形をとった。また、婦人防火クラブとしての非常食、私の自宅に300食置いていたので、それをゆでて食べられる状態にして、夫の勤める役場の総合支所へ持っていき被災者の方に食べてもらった。

ただ、通信もなにもかも寸断しているため、その日は3時で解散して、あとは自分のための時間を使ってもらうようにした。2・3日はこのように地区での活動に専念したが、4日目に唐桑町婦人防火クラブ連合会として各地区のリーダーのみなさんに公民館に集まってもらい今後の取り組みについて相談。高齢者や障害をもった人が公民館に多くいらしたので、公民館でローテーションを組んで炊き出しを実施することにした。

物資については、特にオムツなどの衛生用品は女性の方がわかるので、クラブ員が配布して歩いた。
親族や知人などを各家庭での受け入れたケースも多くあった。2・3人というところから、6人というような家もあった。そこには支援もまだないし、電気も1カ月ぐらい、水道も被害が無いところでも2週間ほど復旧にかかっている。
そこで、自主防災組織と婦人防火クラブが協力しあい、震災から数日後に地区の方たちに寝具や衣類の提供を呼び掛けて集会所に集め、被災者を受け入れている世帯の方などに集会所に集まってもらい、そこで必要な物資を先に持って行ってもらったあとに、残りを他地区に運ぶ、といったことを自主防災組織として行った。また、外部からの支援物資については、地区として全てまとめていただき、一軒一軒に配れるような数になったら、全戸の方に取りに来てもらうようにした。こうすると安否確認にもなる。
また、奥尻島の地震・津波災害のときに、自分たちの地域は孤立するということが想定できたので、当時、町婦人防火クラブとして700枚の非常用毛布を購入し、行政に備蓄として提供して保健福祉センターに保管されていたが、それを今回、各避難所に配布することができた。枚数としては十分ではなかったが、役に立てたと思う。
少し落ち着いてからは、婦人防火クラブと日赤地域奉仕団の予算からお米を25キロずつ、計50キロを購入して、地域内の避難所6か所に対して支援をおこなった。婦人防火クラブのない地域についても支援した。地区内のガソリンスタンドもみな流され、灯油も無い、ガスも今ある分がなくなったら終わりという状態だったが、それでも必死に、私たちは炊き出しや避難所のお手伝いなどを継続した。
80％全壊したという地区もあるが、婦人防火クラブが組織されていたので、その晩から炊き出しが実施され、自治会長さんも大変助かったと言っていると後日聞いた。

②全般（婦防全体としての活動や個別課題など）

■婦人防火クラブとしての取り組みに関して

○それぞれの地区の会長さんたちとは以前から親しく交流し、気持ち一つという形で活動してきたので、連絡が取れずとも、各地区でみなさんはそれぞれ支援活動をしているだろうと確信していた。
○防火クラブ員は全般に通信機器関係に弱いが、あとから聞くと、東京に一度電波を飛ばすと連絡が取れるということも分かった。いざという時の情報連絡についてはもう少し考えられるとよい。
○防火クラブという組織されたものがあると、やはりたいへんであっても、自分の役目というものを感じて取り組もうとできる。そうした環境がなければ、いいや、となってしまったかもしれない。また、常に防火防災意識の高揚を呼びかけていくことが重要だと思う。また、防災だけでなく、たとえば地元では「かぼちゃ粥の会」という取り組みがあるが、そうしたお祭りやイベントでの共同作業が訓練につながっている側面があったと思う。

■日ごろからの関係性

○自宅や自分の地区は大きな被害は受けなかったが、地区内を一軒一軒、協力をいただくため歩いたところ、各家でも灯油やガソリンが無くなりそうだとか、いや昨日たくさん灯油を買ってきたから、といった会話ができ、それも重要だと感じた。日頃、無駄かなと思うような地域のお付き合いも、やはり何かの時には本当に助け合いにつながるのだと感じた。

○自治会との話し合いの中で、男性と女性の違いからくる課題も見えた。特に厳しい状況にある避難所を支援したいと考え、婦人防火クラブとして地区内に呼び掛けて物資を集めたが、運搬などの面も考えて自治会に協力を呼びかけたところ、物資を支援しましたという記名入りの書類があったほうがよい、などと手続き論になってしまい手間取った。自治会はやはり高齢の男性が役員を占めており、男性ゆえに職務の視点から判断しがちだが、女性はどのような場合でも命や健康ということを優先しようとする傾向にあるので、やはり地域内・地域間で女性たちが手を取り合っていくことが大事なのではないか。これは、さらに内陸から沿岸地域の支援に来た人たちについても同じことがいえる。女性同士で話すと、被害がより厳しいところへ持っていきましょうと自然にそういう話になるのだが、男性が入ると「ああすべき、こうすべき」という議論が先行してしまう場面がよく見られた。
○唐桑町での自主防災組織と婦人防火クラブの関係だが、婦人防火クラブは自主防災組織の中で、炊き出し・救護を担うという役割を負っている。つまり協力関係で一体的に取り組んでいるため、今回も地域を挙げた取り組みについては、婦防も含めてみんなで行うことができた。

■被害が比較的少なかった地域としてできること

○自分の住む地域は孤立地区になったからまとまった部分もあったと思うが、津波で被災せずに済んだため、地域としてできる限りの支援をしようとみんなが主体的に行動した。被災していない地区ができる支援もあると思う。「被災していない人は人なりに、できることがあるのではないか？」と、自治会（自主防災会）で話し合い、自分たちで物資を集めあうなどして支援を進めた。
○津波で孤立しがちな地区では道がとても重要。自分たちから道を切り開いていかないと、被災している方たちへ支援もできないし、また自分たちの地区へ帰ってこようとする人たちも帰れない状況だった。

■心の問題の重要性

○災害による避難生活では、共同で生活しているので、先のことよりもまず生きることが大切になる。
しかし今になって思うと、心のケアも必要だった。近所の方で避難所リーダーをしていた方がいるが、どうも自分がおかしいと思って専門の相談をうけると、うつの始まりだといわれたという。
○最初のころは、水をどうしよう、食べ物をどうしよう、どうやってみんなを守っていけばいいのかと気を張っているが、今のほうがかえって苦しい。これからが皆さん大変だと思う。
○家が無いのはみな一緒。しかし事情はさまざまで、家庭の立ち上がり方はいろいろだと思う。頑張れと言われても、それが本当に厳しい人もいる。

■仮設住宅

○私たちの地区の人はみなさん一緒に仮設に入れたが、登米市や岩手に避難した方もいる。やはり横のつながりと心のケアが大切である。
○今入っている仮設住宅では、部落のみんなが揃って入れるようにして欲しいと一緒に頑張り、殆どの人が入居できたが、たまたま当選できずに入れなかった人も中にはいる。今後の災害においては、仮設住宅に入るときに、絶対にコミュニティを壊さないようにしてはいけないと思う。
○現在の仮設住宅に集会所は無いが、テントを張っての移動カフェが来てくれて、高齢者が集まれる状況を作ってくれており、現在は明るい笑顔も見られる。テントを1つから2つに増やしてさらに充実させてくれている。
○仮設の住民たちで、プレハブの談話室を作ってほしいと要望を出している。孤独死を防がなければならない。また、運動場がすぐそばにあるので、歩け歩け運動をよびかけて、みんなで体を

動かすようにしている。何年になるかわからないが、みんなで心通わせることができる場所が必要。
○民有地を仮設住宅の建設地として認めたことから、自分たちで場所を探して建設してもらい、数世帯、十数世帯で入居している例もある。
○火災警報器は各住宅についている。消火器は何件かに一つ目立つところに設置されているが、ＡＥＤは仮設住宅にはない。仮設住宅の台所で、カボチャを煮ててそのまま忘れて、警報器が鳴ったというケースはある。
○これから寒くなると火事が怖い。仮設は密集していて、一度火が出ると大変なので、声をかけて、高齢者は石油ストーブよりもカーペットがよいですよと勧めたりするが、でも簡単ではない。
○婦人防火クラブももちろんですが、私が一番希望しているのは消防団が結成されること。仮設に消防署の方に訪問していただいて、声をかけていただくと、良いのではないかと思う。
○仮設にはくぎ打ちしてはだめということをいわれたが、二重に玄関を作っているところも結構ある。そうするとますます中も見えにくい声もかけにくいということにある。そこが今心配である。

３．今後に向けてとメッセージ

■分析

○お話をうかがった唐桑、気仙沼、本吉、南三陸の各地域ではそれぞれ、総じて地震・津波への意識が高く、備えについては地区によって多少の差はあれ、婦人防火クラブ員は直後より、命と健康をつなぎ、住民の相互扶助の力を引き出すための力を最大限発揮している。
○ヒアリングに出席いただいた広域リーダー個人の高い意識と資質はもちろんのこと、小地区のリーダー間の日頃からのネットワークの強さが、相乗効果として地域全体の支援活動レベルを上げていった側面も認められる。それは、責任感の惹起、情報が途絶えた中での冷静な判断力、被害程度に応じた地区間の相互扶助活動、知恵の共有、心理面での支え合い、などである。
○地域組織（自治会・町内会ないしはそれを母体とした自主防災組織）と婦人防火クラブの協力関係については、好事例とともに、今後検討されるべきと思われる事例も見受けられた。
○地域防災活動については一定の取り組みが行われ来ているため、今後はその維持とさらなる向上が期待されるが、同時に、防災計画上の指定避難所以外にも、災害時には多数の小規模避難所・民間避難所が発生したり、在宅被災者支援がなかなか行き届かない現実を踏まえ（これは東日本大震災に限ったことではない）、支援システムの一環として事前に検討・マニュアル化する必要性も浮かびあがった。
○そのほか、今後の防災活動・防災まちづくりに関する提案としては、以下のような項目が具体的に挙げられた。
＊避難指定場所の見直し。指定された場所で亡くなったかたも多い。いくら高いところが他にあっても指定避難所となれば安心してしまう。
＊一番苦労したのはトイレだった。公衆トイレというものが街中にたくさんあるとよい。
＊わたしの町では考えられないが、個人情報保護の問題もあって、どこに要援護者がいるのかもわからないような状況が広がっている。防災面からこうした状況が正しいのかどうか、検討していく必要があろう。
＊改めて災害、津波に対する勉強をやり直さないと、「津波死ゼロ」に近づくことは難しいと思う。
＊子どもや孫など、子子孫孫に伝えていくことも大切だと感じた。わたしの地区では、土砂崩れや道の寸断が怖い。何があっても生き延びられる力を得てほしい。なので、その時聞いてくれて

いなくてもいいので、普段の何げない時の会話に折々にいれていくことで、あとで思いだしてもらえるのではないかと思う。
＊今後は事業所も地域と連携して防災活動に取り組んでいくことも重要だと思う。避難所として工場を開放していたため、閉鎖したいまでも地区の方たちが向上へ寄ってくれ、「お母さん」と話をしに来てくれる。いつでも解放しますからと地区の方たちに伝えることで安心して頂いている。
（※ちなみに10月時点でも通信だけはまだ復旧しておらず、事業上は厳しい状況という）

■組織の今後

〇今回お話を伺った地域では、被害があまりに甚大であったことから、ヒアリング時点では、活動を見合わせている地区が多いが、各地区のリーダーたちは組織の重要性を深く再認識しており、組織の維持を前提に、再開できる地区から取り組むというような形となっており、今後については様子をみて考えていくという。
〇気仙沼市婦人防火クラブ連合会（旧市エリア）では婦人防火クラブは任意加入で、6地区で婦人防火クラブが活動しているが、この6地区は互いによく交流しながら活動をしてきている。また、本吉町婦人防火クラブ連合会は、地区内に部落が40あり、会長も40人いるので活動しやすい環境にあるという。南三陸町も全戸加入であり、非常に熱心な取り組みが行われてきた。
〇唐桑町婦人防火クラブ連合会では現在４地区にクラブがあり、地区の約8割が壊滅したクラブは活動を休止せざるを得ないものの、それ以外の地区は活動継続。夏は仮設住宅に脱水症予防のチラシを配るなどしている。救命講習会も実施。複雑な海岸線で構成される半島エリアであり、今後も津波被害は避けられないことから、できれば今回経験したことを座談会的に共有しあって、それをまとめて形にしたいとの意向もあるという。

■メッセージ

〇全国の婦人防火クラブのみなさんから物資を頂いたころ、志津川の避難所でのノロウィルスが発生したということで被災者には緊張が走ったが、消毒薬含めいろいろなものを頂いて本当にありがたかった。地元では現在「（効果的な支援というのは）個人はできないので、グループで応援に行く必要があるね」、ということが語られるようになったが、まさに、婦人防火クラブのつながりがある、ということが、どれだけありがたいことだったかと思う。
〇全国の婦人防クラブのみなさんに本当に感謝している。
〇今回、日本中、世界中の方からご支援いただいた。募金、食糧、物資はもちろん、お風呂を提供してくれた方、仕事を投げ出して支援にきてくれた人などもいて、本当にいろいろな支援を受けたと思う。一つでも恩返しができるよう、頑張って行きたいと思う。
〇何もかも無くした今だからこそすべてを持てるような気がする。夢、希望、感謝、あたたかさ、などいままではまだ足りなかった何かを。今度は恩返しができるよう、みんなで力をあわせて頑張って行きたい。

（以上）